I

の

って〇〇でき て

年 学 導 向 審
中央 審 会 企 別 会 基単

何 学
学
何

学 導 善 学 何

① きて く「 」の
② の にも でき 「 」の
③ び や に かそうとす 「 びに かう 」の

の げており こ については の と いはない。
また「 の が しい の でも や に した い ち く
り していくために な たち に に む 」の が さ
□ □□□ □□ □ □□□□□□

であ 。

そして での については この の え のもと「 で い び」の が めら てい 。
さて のような まえ と におけ
に う が らかにな 。 においては の え が して
が に す に えた が く さ てきた。また
そのものが に す であ とも え 。そのため「
では に が であ 」といった の も か 。しかしながら の のあり がそのままで「 で い び」として の
と して していく の できていたかというと が 。
という そのものが つ に かかず の
じて しい に とな の が でき よう に り む があ 。
では のような のもと ぶ だけでなく び そのものにも てた
の に り でい 。 においては とも「 でい び」 し その として いて ができ の した
す 。 には な さだけでなく そこで してい びそのものの
さに さ のないご ご いただきたい。

基調提案

「 」については の によ い ゆ 「 」
において のように さ てい 。
によ な の とは なり の な への
り た の 。 が に す ことによって
めた の 。
が ま が での
も な の であ 。
におけ との では すべき が つあ と えら 。
つは「 」とあ ように ここでは「 」の く す ことなく
とにかく の の す ことが さ てい ことであ 。 な の
の に「 」「 」「 」のように の
ですでに くの が さ てい が ま ており この だけ ば
はない。「 」がもともと の で さ ており も
に いたものであ こと え ば こ は のこととも え 。
「 の 」が てい は と な 。 で してい 「
」とは に からの に さ てい であ が そ そのまま に
して いかは す 。 に に しては の そのものが つもので
あり の としての の て ことが すな ち の に す
のか あ いは の じて さらに の の が さ てい のかが
としない。 に た が その にして の めなけ ば におけ 「 」は にも にも すと 。
この については に りてきた す があ 。 に らかにさ
た によ 「 のまとめ」では「 の 」として 「

ぶか」「どのように　ぶか」「　ができ　ようにな　か」という　つの　　してい　。
まず　　の　た　「　ができ　ようにな　か」については　　には　の「　の
　」　しつつ「　で　して　していくために　な　」という　から　えなおして
のように　げら　てい　。
①　きて　く「　　」の
②　の　にも　でき　「　　」の
③　び　や　に　かそうとす　「　びに　かう　　」の
に　　としての「　ぶか」については「　　」という　が　たに　げら
た。「　　」について　の　　によ　「　　」では
のように　べら　てい　。
　の　において、　き　があらかじめ　まった　　に　け　むだけで
　は　であ　。　の　な　の　でも、　　に　した　として、
　や　に　し、い　と　　って、　さ　た　としながら、　な
　から　が　か　に　し、ら　い　ててその　　し、　と　し
　ながら　たな　　み　していくことができ　よう、そのために　な
　に　け　ことが　であ　。
この「　　」の「　つの　」は　①　③の「　の　」であ　とさ　てい　。ここで
　すべきは「　ら　い　て」「　と　しながら」というように　の　まで
が　に　めら　てい　であ　。　な　し　の　かってい　に　す
という「　」な　ではなく　でしばしば　の　からない　あ　いは　くことが
であ　かすら　な　に　に　む「　」な　が　さ　てい　と　え　。
ただし　この　は　かつて　な　の　が　さ　た　の「　」と「　」の
　に　まってはいないことに　が　であ　。「　　」は　その　な　から　に
い　ではあ　け　ども　と　したものでもない。すな　ち　あ　いてあ
　す　のだが　その　じて　その　の　す　のに　した　が　さ　たり
さ　たりし　さらに　その　さ　た　いて　また　たな　す　というよう
に　と　の　に　な　が　さ　てい　のが「　　」　の　であ　。
こ　に　てはめ　と　な　び　に　す　だけでなく
　けに「　　」さ　た　び　し　す　ということであ　。
そして　そのような「　　」　もとに　にどのような　でいくかとい
うのが「どのように　ぶか」という　であ　。ここが「　　」と　も　く
けら　てい　であり　「　のまとめ」では「　　で　い　び」という
　でその　が　か　てい　。「　」「　」「　い」については　のように　さ
てい　。
①　ぶことに　や　ち、　の　の　と　けながら、
　し　って　り　く　り　み、　の　り　って　につなげ　「
　な　び」が　できてい　か。
②　の　、　や　の　との　、　の　え　かりに　え　こ
　と　じ、　の　え　げ　め　「　な　び」が　できてい　か。
③　で　した　や　え　した「　え　」　かせ、　い
　いだして　したり、　の　え　し　したり、　い　に　、　したりす
　ことに　かう「　い　び」が　できてい　か。
「　」「　」については　そのような　が　してい　かが　の　から

しやすいもので また な の いものと え 。 「 い」については
の に ことでもあり には しにくく しかも という に した
の い であ と え 。
この については に「 え 」という しい が さ てい 。「
え 」とは の「 」のことであ 。すな ち の「 」
の で その では どのように え え か ということ してい 。 につい
ては のような「 え 」が さ てい 。
で し え うため、 やその にあ 、 や 、 との
りに して え、 う に じて、
や の えなど 、 、 す こと
い え ば の や す ことなく の
として しながら い ば の むことが の に めら てい と
いうことであ う。
が の に めら てい の え で
あ が では で ずしも に さ てい とは えない。たとえば のような
「 な 」が さ ことがあ 。
①「 ではない などありえないのでは 」
②「 がなくとも、 が に であ ば
と え のでは 」
③「 ではもともと やってきてい のだから、 まで
りでよいのでは 」
まず ①については「 」という の が にな 。 で え と の
には と の つが えら 。 の として
「 な 」としては があ 。また 「
な 」としては があ 。つまり「 でない 」は しえ ものであ
り「 は してい から であ 」とは えない。
②については としてそのように す ことは だが なくとも めら てい
「 」は の によ に づくものであり その みの
での に しては たな しても がない。 の にあ 「
」とは ではなく の つ として すべきであ 。
③ の としての 「 な 」については かにその
りであ 。しかし の としての 「 な 」について
は ずしもそうとは えない。たとえば がすべて お てした に り む
す と が よく してい ば その では であ が は えら
たもの こなしてい だけなので その では であ 。したがって の にも
の は かにあったが だからといって の す ば そ
がそのまま にな という けではないという つべきであ う。
では の え り た とは どのようなものであ うか。
は の に り ここでは の え り た
しく し す ための み 。
と の して す には かつての
「 の 」 めぐ が ほぼ の として にな と 。
では について のような が さ てい 。

①　　「　　のための　　」
　　「　　のための　　」
②　　「　　の　　」
　　「　　からの　　」
まず　①は　　の　に　　だから　　は　　にな　のが　いのか　　が　　にな
　ための　　として　　い　のか　という　　であ　。　　の　に
　てはめ　と　　め　ために　　り　　のか
　　ができ　ようにな　　つまり　　め　ための　　が　　であ　のか　という
　　であ　。　　におけ　　に　け　ぐならば　　の「
としての　　」　が　　にな　だ　う。しかしながら　　の
への　　ば　やはり　　の　　ばすことも　　に　めら　ており「　　としての
　　」という　　が　いようにも　　でき　。「　　だから　い」
のか「　　が　び　から　い」のか　その　つ　　しておかなけ　ば　　し　また
す　に　　すであ　う。
　ただし「　　」　のとこ　で　　したように「　　」　じて　　が
　につけ　のは　　でもあり　　でもあ　という　に　　が　　であ　。つまり　　つの
　　む　　の　　としては　　として　え　のか　　と
して　え　のかは　いちおう　　しておいた　がよいが　　のとこ　は　　と　　す
　のであ　から　　は「　　う」　　にな　であ　う　ということであ　。
　②の　　は「　　の　　」という　　によって　　す　かの　いであ　。
　　とは「　　が　む　　から　　さ　なくとも　　す　」という　　での
「　　」であ　。したがって　ここで　う「　　」には　　の「　　」が　　す　と　え　。
そ　に　し　　とは　いつ　　ど　だけ　どのように　　す　か
　　が　　していくという　　での「　　」であ　。ここでは　　のありようは
　に　さ　ており　　の　だけ「　」が　　す　と　え　。
　ただし　この　つについては　　は　　というよりは　　から　　へと　　に　　してい
くものであ　とも　えら　　。すな　ち　　のうちは　　に　　き　してもらいなが
ら「　び　」そのもの　　でいき　　が　むにつ　　々にその　　きが　なくなって
　　がさまざまなこと　　していく　という　え　であ　。
　この　え　　に　てはめ　と　　のようなことにな　であ　う。すな　ち
　　のうちは　あ　　の「　」として　　み　　の「　　だけ　ども　　」
な　　や　　さ　た　で　　す　ような　　に　　させ　。しかし　　が　むに
つ　て「　びの　　」　　に　　に　し　　には　　が「　　な」　　になって
いく。このような　　が　　でき　。
　この　　の　　に　てはめ　と　　のように　え　。　　①に　しては
の　　も　　の　　も　　のように　　は　　すものであったと　え　。すな　ち
　　な　　じて　　めようとす　と　　に　　な
　させ　ような　も　めようとしていた。
　　②に　しては　　の　は　　がしっかりと　いた　　の　　が　いよく　って
い　　という　　であったので「　　で　　」な　　であったと　え　。　　の　は
　　での　えあいであったが　　からの　　がほぼない　　での　　であったため　　ど　だ
け　どのように　え　かは　すべて　　の　　に　さ　ていた。すな　ち　かなりの　　「　びの
　」が　　に　けら　ていた。ここには　　って　　々に　　の「　　」あ　いは「

」が　まって　ってい　　が　　ていたと　えよう。
での　　した　　について　その　　し
た。この　　において　この　の　　で　　な　　お　いしたい。

Ⅱ　　の

１．１限公開授業について

後　協　会　　師　役割　学　　化　何　意味　　価　　問

形態　　徒　　分　学　　実
感　　中　　子　　中　　内　　問
姿　　察　　一　　中　　問　少人　　同　　仲　同士
当
徒同士　　取　　対　　不安　　事実
後　協　会　　前　　取　　一　　単　　側
一　　側　　内容　　姿

度合　　図　　側　対　　価　　必　　思
側　何　　反　　善
会　　導上必
今回　徒任
例　　単
分　　係代名　　伝
今後　　応

２．２限公開授業について

の　きな　は　　の　つに　ら　た。　つは　　の　　の　　であ　「　い　び」が　の　で　　できていたのかということ。もう　つは　　の　　に　　が　けていたのではないかという　　であ　。

まず「　い　び」が　　の　　で　　できたかという　については　　では　　できていないといい　ざ　　ない。　　が　　に　まらず、　　の　　の　　であ　「　によ　　の　り　り　」に　　てら　なかったからであ　。　な　は　　が　　の　　ために　　にあふ　、　　によ　　な　　ができなかったことにあ　。　　の　　きした　　に　　できず、　　の　　したため、　り　り　に　　くことができなかった。このことに　しては　　の　からも「もう　し　　の　　が　　であ　」という　　いただいた。

しかしながら、　の　　に　った　り　り　　の　で、　　な　　での　づきに　え、　まえた　　におけ　　づき、　　の　、　み　　した　　の　　などさまざまな　　での　づきが　ら　た　　「　　のまとめ」　　。そういった　　では　　の　　に　じた「い　び」があ　　は　　できたのではなか　うか。

に　　の　　についてであ　が、　　には　　が　　の　　す　　が　　の　　であ　ように　じら　たこと、そうであった　　、より　　な　　であ　　の　　や　　の　　の　など　　す　ほうが　ましいのではないかという　　であ　。こ　はもっともな　　であり、　　もそのような　　していた。また、　の　　も　　の　　ではなく、　　の　　におき　　していた。しかしながら、　　が　　く　　す　ために　　な　　たすことができず　　には、し　いに　　し、　　が　　ような　　つ　　つ　　なかった　、　　で　った　の　　という　に　ち　いた。また、そ　と　　して、　り　いの　　であ　ば

ないのは　　で　という　にも　き　たった。そこで、とあ　　に、　の　　への
　め　　す　かたちとなった。
　その　、「　なった　　もとに　　が　たちの　　み　て　　は　そうであ　」、「
　に　　した　として　いので　でもやってみたいと　う」などの　もあった。